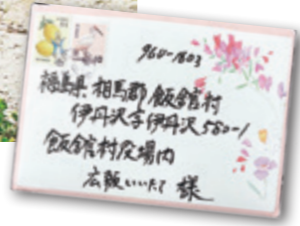




令和3年5月号



「希望をありがとう」
郡山市在住の菅野幹子さんからお手紙をいただきました。「1年前、広報いいいたてにのせていただいた菅野です」という書き出しです。お手紙が届いた前年、令和3年5月号の表紙の撮影でお世話になった方でした。撮影でお会いした観光農園『飯館村フラワーガーデン』に、翌年、母・和子さんと訪れた際のエピソードを、写真と一緒に送ってくださったのです。



昨年の花景色。今春は残念ながら休止の情報が入っています。

幹子さんは前年の花景色が忘れられず、母・和子さんと『飯館村フ



自宅のリビングにて。菅野宗夫さんと千恵子さん(佐須)。

菅野家で「わらじぬぎ」

わらじぬぎ=その土地に来て最初に世話になる家のこと

村の学校で学習指導に尽力してくださった会田完三先生が県外の子どもを連れて学習旅行に来ているとか、香港からの留学生が滞在して村の研究をしているとか、小耳にはさんでずっと気になっていた菅野家の交流の様子をお聞きました。

「出会いに感謝。私達こそたくさんの方の「思いは二つ。この地が元気に復興できること」。震災直後から、宗夫さんは、村に思いを寄せてくれる個人、大学、研究者、さらには行政からの依頼も含め、垣根なく受け入れてきました。「考え方も手段も十人十色なだけで、それは当たり前だし、認め合って協力できれば」と。

近年は、さまざまな大学の学生や県外の親子など、若い世代の訪問も増えていきます。「次の世代になる人には、村で学び取ったことを人生に生かしてほしい。うれしいなあと思つて迎えています」。



帰還前後の村立学校で学習指導に尽力いただいた会田先生。コロナ禍で中断した毎夏の訪問を再開の予定。

「出会いに感謝。私達こそたくさんの方の「思いは二つ。この地が元気に復興できること」。

妻の千恵子さんも「楽しいよ、いろいろな人に出会わせてもらつて。私にできるのは何か食べさせることくらいだけ」と笑います。「学生さんとか、何年かすると、またすーつと来るの。そういうつながりになると本当によい」。漬物を出したり餅をついたり。温かいけどよそゆきじゃない雰囲気、実家のような居心地のよさになっているのかもしれない。

菅野家でわらじぬぎをした人が、また村に。緑が時間をかけて紡がれていきます。



某大学の紹介で、留学中の香港の方が時々居候。村で研究をしています。毎回「ただいま〜」と戻って来るそう。

花農園の小さな奇跡

広報取材の現場で出会い撮影に協力いただいた方から、その1年後に心温まるお手紙をいただきました。出会った場所での新たなできごとを伝えてくださるお手紙でした。素敵なエピソードを皆さんにも共有します。



フラワーガーデン』にやってきました。和子さんは当時92歳。着いた時には疲れてしまい「車で待つていたい」と言うので車椅子を借りたそうです。入園すると、その日は200円でチューリップが詰め放題の日。和子さんは「このきれいなチューリップが詰め放題？」と言うなり立ち上がり、張り切ってチューリップを取り始め、さらには「紫色もほしいな」と、車椅子を押しながらスタスタと坂を登って行きました。最後には袋がはじける程たくさん取って大満足。車の中で2人で大笑いしながら帰ったそうです。今は、庭に植えたチューリップが花開く春を楽しみにしているとのこと。お手紙は「年を重ねた人に希望や夢を持つてもらうことの難しさを感じていた。昨今、飯館での出来事に感謝の言葉しかありません」と結ばれていました。